

台地型寺内町の防災防衛的特性

DEFENSIVE AND DISASTER PREVENTIVE CHARACTERISTICS SHOWN IN THE TEMPLE COMPOUND TOWNS ON THE PLATEAU CONSTRUCTED IN THE AGE OF CIVIL WAR

青柳憲昌¹・臼井秀一郎²・坪田叡伴³・大場修⁴
Norimasa Aoyagi, Shuichiro Usui, Eban Tsubota and Osamu Oba

1 立命館大学講師 理工学部建築都市デザイン学科 (〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1)

Lecturer, Ritsumeikan University, Dept. of Architecture and Urban Design

2 立命館大学大学院 理工学研究科環境都市専攻 (〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1)

Graduate Student, Ritsumeikan University, Graduate school of science and engineering

3 立命館大学大学院 理工学研究科環境都市専攻 (〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1)

Graduate Student, Ritsumeikan University, Graduate school of science and engineering

4 京都府立大学教授 生命環境学部環境デザイン学科 (〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5)

Professor, Kyoto Prefectural University, Dept. of Environmental Design

Jodo-shin sect's Jinaimachi, the temple compound towns, constructed mainly during the age of civil war (16th century) were self-government-like religious cities with defensive and disaster preventive characteristics. Especially early formed Jinaimachi towns were located at the tip of the plateau adjacent to rivers, constructing a moat on the other side, which reflects the high priest *Rennyō's* idea of the town. These towns were basically composed of orthogonal city-blocks, regardless of the land with ups and downs, surrounding the main temple of the town treated as a disaster prevention center. Those towns' relatively low house density produced a blank area behind houses on each lots, installed waterways on parting lines from the facing lots, that seems to be effectively functioned as a fire prevention vacant land.

Keywords : *Jinaimachi, Temple Compound Town, Ren-nyo, Tondabayashi, Castle Town*

1. 序

戦国時代に成立した「寺内町」は、浄土真宗の寺院を中核とする自治的な宗教都市であり、真宗の主な布教域であった近畿・北陸地方に数多く立地している。一部を除き自然発生的な都市ではなく、人為的に計画・建設された新都市であり、本願寺第8世法主・蓮如(1415～99)が主導した浄土真宗本願寺教団(一向宗)の拡大と一向一揆の高まりを背景に、既存の諸体制による宗教弾圧に備え、防災防衛¹⁾を重視した都市が多く建設された。寺内町は16世紀末に解体されるが、富田林や今井のように17世紀の貨幣経済・商品流通経済の発展を背景に変容し、その後も「在郷町」として繁栄した都市も少なくない。蓮如による最初の寺内町・吉崎が四周を低地で囲まれた天然の要害であったように、「防災防衛」重視の観点から台地上に建設された寺内町は少なくなく、本稿ではこうした寺内町を「台地型寺内町」と呼ぶ。大坂寺内町の石山本願寺が織田信長に降伏する天正8(1580)年が寺内町建設の画期とされ、これ以降は防衛が最優先されなくなり、台地型寺内町の建設は減少することが指摘されている²⁾。逆にいえば、台地型寺内町は、寺内町成立当初の都市理念をよく示すものと見ることができる。

既往の文献において、寺内町がのちの近世城下町の「原型」となったことは従来しばしば言及されてきた³⁾。現代日本の都市の多くが近世城下町を母胎とすることを考えれば、その「原型」としての寺内町の持つ歴史的意義は大きいといえよう。本稿は、とりわけ防災防衛が重視された都市といえる台地型寺内町について考察したものであり、その目的は、これまで十分に解明されていなかった寺内町の防災防衛的特性を明らかにすることにより、寺内町、ひいては城下町を起源とする多くの歴史都市の防災計画上有効な指針を得ることにある。一般に歴史都市の文化的価値を損なわずに防災性能を向上させるには、歴史都市が本来有している

防災特性を十全に踏まえた上で、現代的施策がなされるべきであることは改めていうまでもない。

また、従来の研究では寺内町と城下町の計画技術上の関連性についても十分解明されていないが、両者の計画上重要な点の一つである防災防衛的な計画意図の解明は、都市史学上両者の関連の有無を探る上で不可欠の点であり、本稿の学術的意義の一つもその糸口を掴むことにある。

本稿で取り上げた11の都市は、寺内町に関する代表的な既往文献である『寺内町の研究 第1～3巻』（法蔵館、1998）において、台地上に立地することが指摘されているものである⁴⁾（表1、図1）。同書をはじめとする既往の寺内町研究には、個別の都市の防災防衛的な特徴に触れるものはあるが、寺内町を総体的にその側面において論じたものはほとんどない。台地型寺内町に限って見ても、地形的な観点から防衛性に優れるという点や、環濠城塞化されるという寺内町全般にも当てはまる点については既に指摘されているが、その他にどのような防災防衛的特性があるかについては必ずしも明確化されていない。

なお、「台地」という用語の意味は、『地形学辞典』（二宮書店、1981）によれば、「比較的高度が高く面積の広い平坦な表面を有し、一方またはそれ以上の側面が急に低地へ下っている地形」のことで、日本の台地の多くは「洪積台地」であり、それは基本的に河川・波浪の侵食による「河岸段丘」あるいは「海岸段丘」であるとされる。ほかにも「台地」には地殻変動による「隆起扇状地」や火山活動による「溶岩台地」などの類型があるとされるが、本稿で取り上げた都市の台地はいずれも洪積台地である。

2. 台地の地形を活用した都市建設

2.1 台地型寺内町の立地状況

既述のように台地型寺内町はいずれも河川の浸食作用で形成された河岸段丘上にあるが、各町の立地を見ると、その多くはその台地を形成した河川に隣接している（11都市中7都市）。いうまでもなく河川は濠となって外敵の侵入を防ぎ、また、本願寺教団は商業手段としての河川交通の重要性を十分意識して都市を建設していたことが既往文献でも指摘されている⁵⁾。ほとんどの台地型寺内町は3方向を低地に隣接する舌状台地の先端部に立地している（11都市中9都市）。換言すれば、台地を形成した2つの河川の合流地点付近に立地するものが多いということである。当然ながら台地の先端部は洪水被害の危険性も少なく、また、土地の高低差は外敵の侵入を防ぐ意味においても防衛上有利である。

具体的に各都市の地形を見ると（図1）、大坂（上町台地）、金沢（小立野台地）、富田林（羽曳野丘陵）、大ケ塚（河南台地）、城端（立野ヶ原台地）の5都市は、三方を低地または開析谷に囲まれ、残りの一方は台地に連続している。吉崎は四方を低地に囲まれるが、より広域的に見れば、東方に続く小立野台地の先端部にある。富田・富田東岡と井波は、三方低地の明瞭な地形とはなっていないが、国土地理院「土地条件図」や「都市圏活断層図」に示された地形分類を見ると、前者は更新世段丘の上であって台地斜面・低地に囲まれているし、

表1 台地型寺内町の特徴

番号	令制国	寺内町	所在地（現在）	中核寺院		寺内町 推定成立年代※3	台地名	先行集落※4	ハザードマップ※5		高低差※6		土地の傾斜		
				寺院名称	建立年※1				町内立地（正面）※2	洪水浸水の危険性	土砂災害の危険性	町内	町内外	町内(A-A)	町内外(B-B)
1	越前	吉崎	福井県あわら市	御坊	1471	西（北面）	1471	小立野台地	無	無	無	2m	32m	0.7°	36.5°
2	越中	井波	富山県南砺市	瑞泉寺	1390	南東（北面）	1481頃	八乙女山麓	有	無	土砂災害警戒区域	13m	13m	2.2°	8.7°
3	摂津	富田	大阪府高槻市	御坊→教行寺	1475	中央（東面）	1569以前	富田台地	無	洪水浸水想定区域（0.5m）	無	3m	5m	1.2°	7.6°
4	摂津	大坂	大阪府大阪市	御坊→本願寺	1496	南西	1496頃	上町台地	無	無	無	—	21m	—	—
5	摂津	富田東岡	大阪府高槻市	本遇寺→光照寺→本照寺	1427	南西（南面）	1536以降	富田台地	無	洪水浸水想定区域（2m）	無	6m	8m	1.1°	10.1°
6	加賀	金沢	石川県金沢市	金沢御堂	1546	南	1546頃	小立野台地	無	無	無	—	44m	—	—
7	河内	富田林	大阪府富田林市	道場→御坊→興正寺別院	1558	中央（東面）	1558	羽曳野丘陵	無	無	無	1m	15m	0.9°	28.2°
8	河内	大ケ塚	大阪府南河内郡	善念寺→顯証寺	1568	西（東面）	1568	羽曳野丘陵	無	無	無	7m	18m	1.0°	20.9°
9	河内	金田	大阪府堺市	道場→光照寺など	鎌倉期	西（南面）	1569以前	三国ヶ丘台地	有	無	無	5m	9m	0.6°	0.9°
10	河内	大伴	大阪府富田林市	道場→日照寺	1572以前	北	1572	羽曳野丘陵	有	無	無	3m	14m	0.9°	7.8°
11	越中	城端	富山県南砺市	善徳寺	1571	西（東面）	1582	立野ヶ原台地	有	無	無	22m	28m	1.2°	30.8°

※1 中核寺院の建立年代は『寺内町の研究』（法蔵館）所収の諸論考、及び『日本歴史地名大系』（平凡社）の記述をもとに作成。

※2 中核寺院の町内立地について、寺院が現存しないものは次の文献を参照しながら位置を比定した。吉崎は朝倉喜裕『吉崎御坊の歴史』、大阪は伊藤毅「摂津山本願寺寺内町の構成」『寺内町の研究 第2巻』所収、金沢は田中喜男他『伝統都市の空間論・金沢：歴史・建築・色彩』。

※3 寺内町推定成立年代は『寺内町の研究』（法蔵館）所収の諸論考、及び『高槻市史』（高槻市役所）の記述をもとに作成。

※4 「先行集落」の有無は『角川日本地名大辞典』（角川書店）の記述をもとに作成。

※5 ハザードマップは国土数値情報「浸水想定区域データ」（平成24年）・「土砂災害警戒区域データ」（平成27年）にもとづく。

※6 高低差については、国土地理院測量の基盤地図情報（数値標高モデル）を用いた。

後者は下位・中位段丘面の上であって旧町域の東西に沖積低地がある。一方、金田と大伴は、台地の縁ではなく内側にあり、そのため町内外の高低差はあまり大きくないが、金田は鎌倉～南北朝時代の先行集落（金

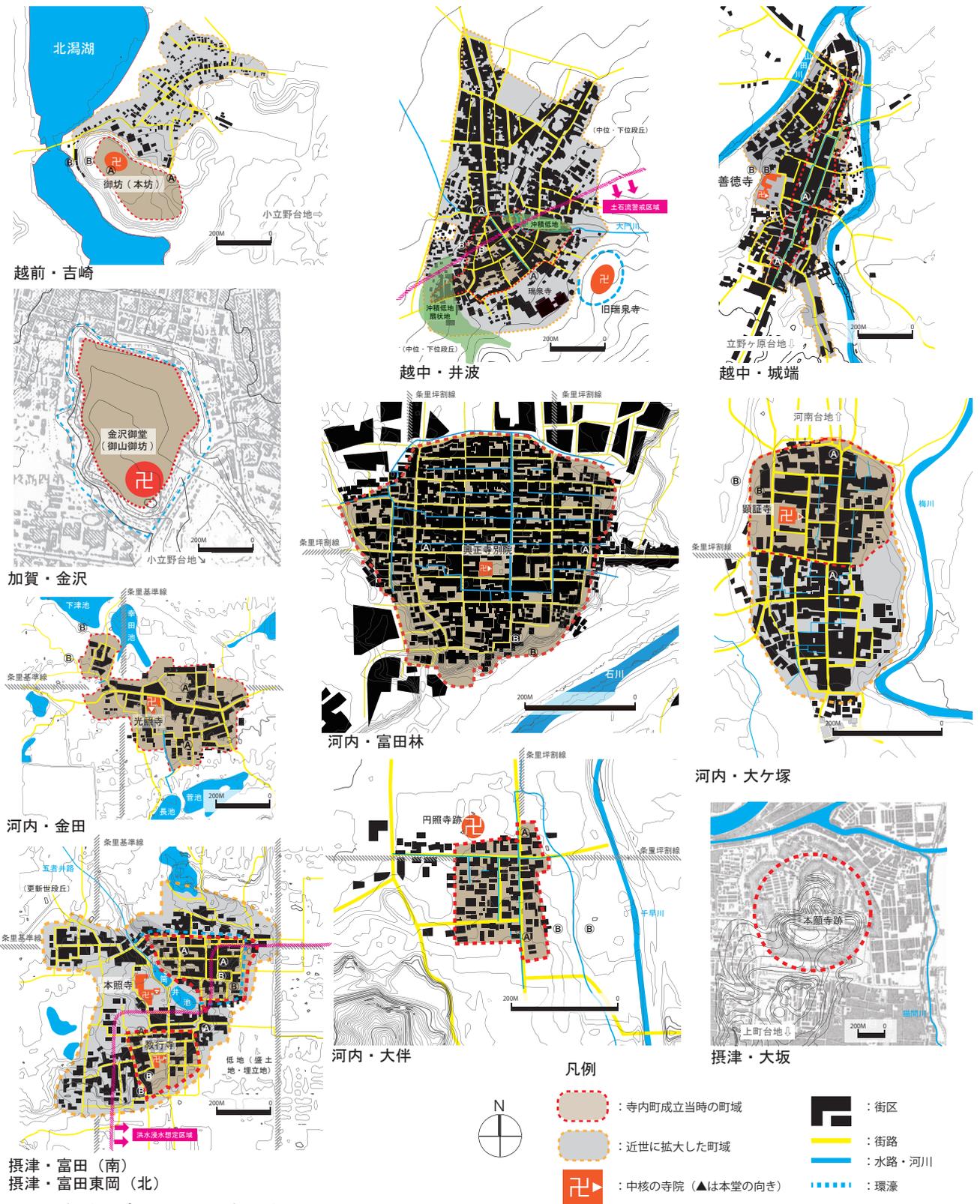


図1 台地型寺内町の町域・地形

※ 各図の下図は大日本帝国陸地測量部による明治・大正期の地図（『正式二万分一地形図集成』所収、柏書房、2001）を用いた。
 ※ 各図の等高線は「等高線メーカー」（埼玉大学教育学部谷謙二研究室作成）を用い、大坂は現大阪城周辺の旧地形図（『大阪の歴史 第9号 1983所収）を用いた。なお、①・②は本稿表1で高低差・傾斜角を算出した箇所を示す。①は町域内の土地傾斜角度が大きい2地点を選定したもので、②は町域外周部の台地斜面のうち最大傾斜角度となる2地点を選定したものである。
 ※ 富田・富田東岡の洪水浸水想定区域、井波の土砂災害危険区域は国土数値情報「浸水想定区域データ」（平成24年）・「土砂災害警戒区域データ」（平成27年）をもとに作図した。寺内町成立当時の町域に災害危険区域が含まれるもののみを图示した。

田郷)の上につくられた寺内町であるし、大伴も奈良時代からの集落で、いずれも新都市として建設されたものではない。

2.2 現代のハザードマップに見る災害危険性

ここで現代のハザードマップを見ても、台地の先端部という特徴的な立地により、いずれの都市も災害危険性は相対的に低かったと考えられる。河川洪水の危険性については、国土交通省のハザードマップ⁶⁾によれば、富田・富田東岡だけが淀川の洪水浸水想定区域に一部含まれているものの、その他の都市はいずれもそれに含まれていない。一方、土砂災害については、井波だけが背後にせまる八乙女山からの土石流の警戒区域に含まれているが、その他はいずれも含まれていない。井波は寺内町成立以前は門前町であったから例外的とすれば、寺内町は総じて土砂災害の危険性の高い場所を避けて建設されたといえる。なお、吉崎や城端などでは、台地の下(寺内町の外側)が「急傾斜地の崩壊」の警戒区域・特別警戒区域に含まれている。

2.3 台地斜面の扱いと台地方向の防衛設備

各都市の立地する台地と低地との高低差や、台地縁の斜面の傾斜角を見ると(表1)、吉崎、大坂、金沢では高低差が20m以上もあり、真宗布教の拠点となった政治性の高い寺内町は、他の寺内町と比較して急峻な台地上に立地し、とりわけ防衛が重視されたことがうかがえる。また、都市域内の土地の傾斜は9都市中8都市がおよそ2度以下で、台地上の平坦な土地に都市が建設されたことがわかる。

台地斜面の扱いを見ると、富田林、富田東岡、城端については江戸時代の絵図から寺内町当初の様子をうかがうことができる。まず、富田林は、安永7(1778)年の「富田林村絵図」(図2)を見ると台地斜面に竹藪が配されている(旧町城南の台地斜面に竹藪が現存)。富田東岡も、享保年間のものとしてされる⁷⁾「富田(東岡宿)絵図」(図3、清水家文書、『高槻市史 第4巻』所収)を見ると台地斜面に竹藪が描かれ、城端では宝永7(1710)年「城端絵図」(図4)に石垣が描かれている(旧町城西端に石垣が現存)。竹藪や石垣は斜面崩壊を防ぐとともに、数の限られた出入口以外から都市へ侵入できないようにしたものであり、富田東岡では出入口に木戸門や番屋が設けられている(図3)。一方、大ケ塚や井波の近世絵図にはそれらの防衛施設を確認できないが、寺内町の解体後に破却されたところもあったであろう。

一方、台地の先端部では、低地に面さない台地側の方角が防衛上の弱点となるため、下記のように、その方面に堀をつくって都市の四周を圍繞するものがよく見られる。たとえば、富田林では北方の台地側に堀をつくり(堀の一部は現存)、この北辺の堀は都市内からの排水に利用されていたと見られている⁸⁾。後述のように富田林の背割水路や用心堀は寺内町時代から存在した可能性が高く、都市の排水系統を考えるとこの堀も寺内町時代に遡るものと見てよいと考えられる。大ケ塚でも明治29年作成の「地籍図」などより、都市の北の隣村との境界線上に水路(「北ノ堀」)があったことが知られており、これも富田林と同じく排水路として活用されていたらしい⁹⁾。富田東岡では、前掲「富田(東岡宿)絵図」(図3)を見ると、台地側(北西方向)も含めて都市全周に堀と竹藪を巡らして環濠城塞化されている。現存しない大坂寺内町は現在の大坂城の地にあったことが有力視されているが¹⁰⁾、『石山本願寺日記 下巻』(上松寅三編、1930、p.227)所収の「私心記」には、天文3(1534)年2月3日条に寺内町の南側にあったとされる清水町に「堀」がつくられたことが記されており、さらに大阪城建設以前の地形復原図¹¹⁾を見ると(図5)、現大阪城南の外堀付近に地形の凹みがあって、寺内町時代もこの凹みを台地側の防衛に利用していたものと思われる。

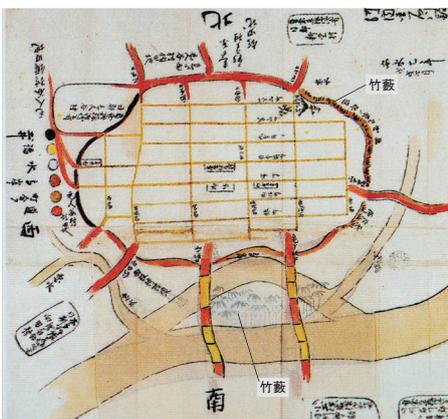


図2 富田林絵図 安永7(1778)年
出典:『民家と町並み』世界文化社、1989(加筆)



図3 富田(東岡宿)絵図 清水家文書
出典:『高槻市史 第四巻』高槻市編、1974(加筆)



図4 城端絵図(宝永7年)
『城端町の歴史と文化』2004(加筆)

3. 都市計画に見られる防災防衛的特性

3.1 防災防衛拠点としての中核寺院の配置と町割

浄土真宗寺院本堂の多くは正面を東に向けることが知られるが¹³⁾、寺内町の中核寺院も原則的には東面し、本堂正面が町並みに向くように町域の西寄りに配されるものが多い。下記のように中核寺院が現存しない都市でも、その推定位置は町域の西側と考えられるものがある。また、中核寺院の敷地は、町域内の高度が高いところにあることが多いが、これは防災防衛拠点としての中核寺院の役割上合理的で、また、土地の高低差を利用した都市空間の階層^{ヒエラルキー}の表現であったとも解釈できる。本願寺教団はこうした点を考慮しつつ、一般に起伏がちな台地の地形を巧みに読み込みながら都市建設を行っていたといえる。

中核寺院を町の西寄りに配置し、本堂を東面させる寺内町は、それが確認できる8都市のうち4都市である(表1・図1)。富田林や富田の中核寺院は町域の中央付近にあるが、本堂はいずれも東面し、その前面には町並みが広がる。富田林の興正寺別院はほぼ平坦地にあるが、富田の教行寺は南東に傾斜する少し高い土地にあり、そこからは低地への見通しもよい。井波と金田の中核寺院は東面しないが、いずれの町も元来寺内町として新規に建設されたものではなく、特に井波については北下がり^{北下がり}の地形上本堂が北向きなのは必然的で、現在の地形を見れば、寺内町当時の瑞泉寺が町域よりも一層高い丘上にあったことは明瞭である。

寺内町当時の寺院の位置が不明なものを見ても、たとえば大坂の石山本願寺の位置は諸説あるが、いずれの説も本願寺は都市の西寄りに比定されている¹⁴⁾。本願寺が現在の大坂城の南西部(大手門～二の丸付近)に位置していたとすれば、前掲の中世の地形復原図(図5)により都市域内の最高点付近にあったといえるし、『信長公記 巻十三』(江戸初期)には石山御坊について「方八町に相構へ、真中に高き地形あり。爰に一派水上の御堂こうこうと建立し」(傍点引用者)と記されている¹⁵⁾。一方、金沢は、田中喜男氏による金沢御坊付近の推定復原図(図6)によれば、「御堂」はのちの金沢城本丸付近にあったとされ¹⁶⁾、都市の南端になるが、そこは町域の最高点付近であるから、ここでは高台に配置することが優先されたのであろう。

次に各都市の町割については、管見の限り寺内町成立期における都市の具体的な様相を示す資料はほとんど残されていないので、近世の絵図や検地帳などをもとに検討するしかない。近世絵図や明治・大正期の古地図を見ると(図1～4)、台地上は起伏がちな地形であるにもかかわらず、台地型寺内町の町割は原則的に直交街区で構成されているといえる(9都市中6都市)。とりわけ富田、富田林、大ケ塚、および大坂(推定復原)¹⁷⁾は、中核寺院をコの字またはロの字に街区が取り囲むという構成になっており、そこには防災防衛優先の都市理念がよく示されていると考えられる。地震や火災の際、寺院は防災拠点として機能したであろう。また、直線道路であっても、見通しを妨げるように屈曲させたり、喰い違いを設けたりしているものが散見される(城端、富田林、大ケ塚など)。

なお、富田林については、台地上を盛土して人工的に平坦地をつくり、そこに都市を建設したことがうかがえる点で注目される。近年の発掘調査によれば、町域の北部、富筋・富山町の交差点北東の敷地において約20cmの盛土層が確認され、その出土遺物から盛土は寺内町成立当初に行われた可能性が高いということが指摘されている¹⁸⁾。出土遺物には背割水路の痕跡も含まれていたことから、現在の町割は寺内町時代に遡るものと考えられる。

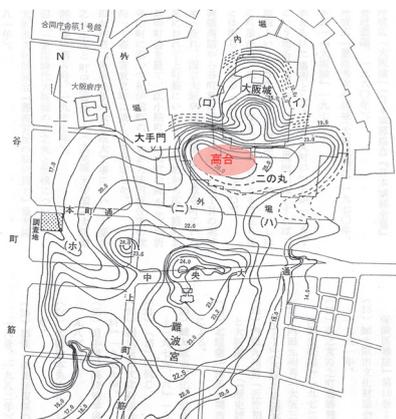


図5 現大阪城周辺の旧地形図

木原克司「豊臣・徳川両氏の大坂城検出遺構とそれをめぐる若干の考察」『大阪の歴史 第9号』1983(加筆)

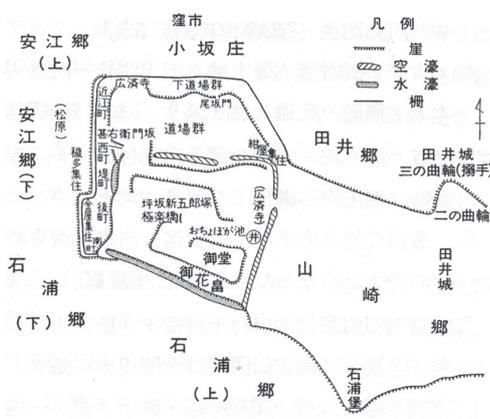


図6 金沢寺内町の推定復原図

出典：田中喜男他『伝統都市の空間論・金沢』1977



図7 井波絵図(元文3年)

出典：『瑞泉寺と門前町井波』2005

3. 2 古代条里地割との関係

寺内町の建設に先行する古代条里地割と町割との関係を見ると¹⁹⁾、北陸4都市（吉崎、井波、金沢、城端）は条里制が敷かれたと推定される土地から遠く離れたところに立地している。一方近畿7都市（上記以外）は条里地割の復原範囲内かそれに隣接するところに立地し、うち富田と金田は条里地割とは異なる方位で町割がなされている。これらの町では先行地割と無関係に都市計画がなされているわけで、そこに既存の諸体制と対峙するように自立的都市を建設した本願寺教団の都市理念の反映を見ることができる。

なお、富田林、大ケ塚、大伴では、一部の主要道路が条里制の坪割線の延長線上とおよそ一致している。それらの道路には喰い違いや屈曲が設けられ、また、その道路に面さないように中核寺院が配置されており、そこには防衛重視の計画意図が示されている。

3. 3 表通りの防火用水路

都市の防災上注目されるのは、主要道路に防火用水路を設けているものが散見されることである。たとえば、富田林の安永7年の町絵図（図2）を見ると、主要道路である城之門筋に「用心堀」と書き入れられている。この用心堀は現在は暗渠化されているが、興正寺別院から北辺の堀までの防火用水路のことで、平常時は各街区の背割水路と北辺の堀を繋ぐ排水路として使われていた²⁰⁾。また、城端も、宝永7年の町絵図（図4）により主要道路の中央線に水路が敷設されていたことがわかるし、井波も元文3（1738）年の「井波絵図」を見ると八日町通りの中央線に水路が描かれ、その水路の姿は『二十四輩順拝図絵』（1803頃）に描かれている。これらはいずれも豪雪地の消雪用水路と思われるが、防火用としても機能したと考えられる。

3. 4 農村的な低密都市の防火空地帯

以下に示すように、台地型寺内町は総じて低密都市であったと考えられる。既往研究では、寺内町には「農村的」なものや「都市的」なものがあることが指摘されているが²²⁾、その見方に従えば、台地型寺内町は総じて「農村的」であったといえる。すなわち、街路に面する各敷地の間口は広く取られ、そのために各町家の平面は横長となり、その一方で直交街区の町割を基本としているので、敷地の奥には広い空地（畑）が取られる。都市全体として見たときに各街区には、いわば防火空地帯が形成されることになるわけで、これにより火災の際には延焼を抑制する防災的な効果を生むと考えられる²³⁾。

まず、各都市の家屋密度・人口密度を検討すると（表2）、資料的制約から比較する時代にばらつきがあるが、江戸時代においては、城端を除き、およそ2,500戸/km²、10,000人/km²以内に収まっている（各都市の面積は、検地帳などの古文書の記載では町域が不明瞭ということもあり、明治・大正期の古地図をもとに寺内町の都市域を比定した上で算出した）。当時の大都市を見ると、大坂升屋町は23,300戸/km²、79,200人/km²（1825）²⁴⁾、堺は7,800戸/km²、28,900人/km²（1655）²⁵⁾であったことを勘案すれば、台地型寺内町は総じて低密度であったといえる。城端は比較的高密であるが、この町はもともと土地の土豪・荒木氏の城下町が寺内町化されたと考えられており²⁶⁾、そうした成立事情を一因として下記のように「都市的」な寺内町に分類されると考えられる。

次に、検地帳の記載を見ると、富田林、富田、金田については「屋敷」・「畠（畑）」・「田」の面積が表3のようにになっている。富田と金田については「田」の面積比率がきわめて大きい。富田の近世復原地図（図8）に見られるように、両町ともおそらく町域の外側に「田」が広がっていたのであろう。実際、慶長検地帳には「田」の記載がない富田林には、農業従事者も多く居住していたと考えられており、それゆえ「保有する田畑は他村への出作地」であったと指摘されている（『富田林市史 第2巻』p.643）。

なお、農業用の灌漑用水の確保について、台地上の都市は河川上流から長距離の用水路を敷設する必要がある。たとえば、金田は、中世には約6.5km南の狭山池（親池）から幹線水路の西除川が北上し、そこから水道によって子池に配水していたとされる²⁷⁾。また、富田・富田東岡については、前掲の近世復原地図（図8）によれば、約4.0km北西の安威川上流から「五者（社）井路」および「下登岡崎水路」を経て富田寺内町北西の筒井池に至る水路があったとされる。さらに、金沢では、のちの金沢城の西側にあった「堤町」に「用水」が引かれていたことが『金沢古蹟志 卷廿三』（第9編、pp.21-22）に記されている。ちなみに、金沢では、寛永8（1631）年の大火により痛感された「城内水利の不便」を解消するため、翌年、犀川上流約10.0kmの上辰巳村から隧道とサイフォンを用いて二ノ丸まで引くという辰巳用水が敷設されたが²⁸⁾、これは「防火」を主眼とする大規模な土木工事と見られる点で注目される。

一方、検地帳に記載された「畠（畑）」の多くは町域に内包されるものと考えられる。富田林の検地帳に「田」の記載がないのに「畠」の記載があることはそれを示しているし、上記のようにこの3都市の家屋密度・人口密度が低いこともそれを傍証している。そのように見ると慶長期の富田林では町域の約19%が畑であっ

たとえられ (表3)、また『富田林市史 第2巻』(p.644)には、江戸期における家数の推移から空地(畑)が急速に宅地化されていったことが指摘されている。

峰岸純夫「一向一揆」(『岩波講座 日本歴史8中世4』1976、p.143)の中で指摘されているように、そもそも寺内町は「商業・手工業者が集住」したもので、寺内町が獲得した自治的特権も、すなわち「商工業発展の障害の除去を内容とした都市法」であった。しかし、実際には、上記のように農業従事者が多く居住し、町域内には広い畑があって、「農村的」といえる寺内町は少なくなかったと考えられる。

一方、今回調査した範囲で「都市的」な寺内町としては城端があり、その町域内の畑は相対的に少なかったと考えられる。元禄6(1693)年の「組中人々手前品々覚書帳」²⁹⁾には町人の家職が記載されているが、旧寺内町の町域であった町を見ると(つまり東新田町・西新田町・新町野下町を除く)、「絹商売」とか「手間絹」などの商業・手工業従事者が圧倒的に多く、「田畑作り」とか「田畑請作」等と記載された農業従事者は419世帯中49世帯(約12%)で、そのうち農業を専業とするものは18世帯(約4%)のみである。試みにこの数字を富田林と比較すると、寛永21(1644)年「河州石川郡之内富田林家数人数万改帳」(『富田林市史 第4巻』所収)によれば、村内の全285戸の戸主のうち、商人79、職人33、肩書き記載なし173であり、脇田修氏の研究によれば、肩書き記載なしは基本的に「農業経営者」であったと考えられている(脇田修「在郷町の形成と発展(上)一河内国石川郡富田林を中心に」『ヒストリア』1957年12月号、pp.37-47)。また、城端の上記資料には「居屋敷」の「町口」(一筆の間口)が記載されているが、それを見ると標準的な「居屋敷」の間口幅は3.0~4.9間(58.1%)と考えられる(表4)。それに対して、文禄5(1596)年の富田林における一筆の表間口を見ると5.5~7.0間が218筆中95件筆(44%)で、6間が標準的であったとされるから³⁰⁾、城端の一筆の間口は富田林の半分程度しかなかったといえる。

4. 結論

本稿では台地型寺内町の防災防衛的特性について下記のことを明らかにした。

台地型寺内町はいずれも河岸段丘上に立地するが、その多くはその台地を形成した河川に隣接し、舌状台地の先端部にある。台地の先端部は防衛上有利であるだけでなく洪水被害の危険性も少なく、現代のハザードマップを見ても、その地形によって災害危険性(洪水浸水・土砂災害)は相対的に低かったと考えられる。また、真宗布教の拠点となった政治性の高い寺内町は、他の寺内町と比較して急峻な台地上に立地し、とりわけ防衛が重視されたことがうかがえる。台地斜面には、斜面崩壊防止とともに出入口以外から侵入できないように竹藪・石垣を配するものが散見される。一方、低地に面さない台地側の方角は防衛上の弱点となるため、堀をつくって都市の四周を圍繞している。

表2 台地型寺内町の戸数密度・人口密度

令制国	町名	戸数密度 (戸/km ²)	人口密度 (人/km ²)	町域面積(ha) ※1	戸数	人口	年代	資料 ※2
摂津	富田・富田東岡	1,667	7,245	30.6	510軒	2,217人	1787	(1)
河内	富田林	2,240	9,473	12.9	289軒	1,222人	1644	(2)
河内	大ヶ塚	2,511	10,044	9.0	226籠	904人	1834	(3)
河内	金田	—	7,052	24.9	—	1,756人	1875	(4)
河内	大伴	1,066	5,966	3.0	32軒	179人	1746頃	(5)
越中	城端	3,134	17,560	21.6	677世帯	3,793人	1693	(6)

※1 町域面積は、検地帳などの古文書の記載では町域が不明瞭ということもあり、明治・大正期の古地図をもとに寺内町の都市域を比定した上で密度を算出した。
 ※2 「資料」欄の番号は次の通りである。

- (1) 天明7(1787)年「富田村明細帳」(『角川日本地名大辞典』)
- (2) 『角川日本地名大辞典』
- (3) 天保5(1834)年「家数人別増減差引帳」(『角川日本地名大辞典』)
- (4) 『角川日本地名大辞典』
- (5) 「石川郡二四ヶ村明細帳」『富田林市史研究紀要 第四号』1974、p.81
- (6) 元禄6(1693)年「組中人々手前品々覚書帳」『城端町の歴史と文化 史料編』所収、2004

表4 城端町の「居屋敷」の町口(間口) 元禄6年

町口(間)	1-1.9	2-2.9	3-3.9	4-4.9	5-5.9	6-6.9	7-7.9	8-8.9	9-9.9	10-10.9	11~	合計
居屋敷の数	3	73	111	158	78	26	8	2	2	1	1	463
割合(%)	0.6	15.7	24.0	34.1	16.8	5.6	1.7	0.4	0.4	0.2	0.2	100

表3 台地型寺内町の土地利用

町名	資料作成年	田	畑(畑)	屋敷	資料
富田林	慶長13(1608)	0坪	3,708坪	16,226坪	※1
富田	天明7(1787)	431,009坪	19,199坪	57,285坪	※2
金田	延宝5(1677)	547,589坪	24,481坪	35,967坪	※3

※1 「富田林村屋敷方検地帳」『富田林市史第4巻』所収(伊藤裕久「在地寺内町の空間形成」『寺内町の研究 第3巻』所収、p.80)
 ※2 「富田村明細帳」吉田泰造家文書『高槻市史第4巻(二)』所収
 ※3 「小松信次文書」『堺市史続編第4巻』所収
 各町の面積は単位を町・反・畝を坪に換算したものである。

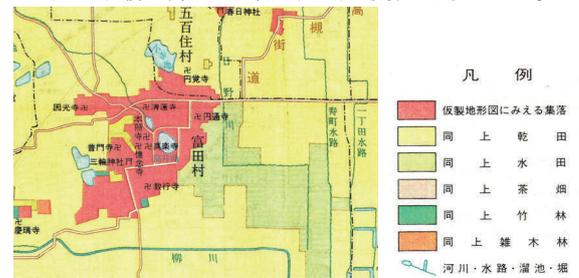


図8 富田の近世復原地図 出典:『高槻市史』所収

※元禄6(1693)年の「組中人々手前品々覚書帳」(『城端町の歴史と文化 史料編』所収、城端町史編纂委員会編、2004、pp.5-244)をもとに作成。
 ※「居屋敷」のうち「町口」の値を集計した。「町口」の記載の無いものは計上していない。

真宗寺院の本堂は正面を東に向けるのが基本であるが、寺内町の中核寺院も原則的には東面し、本堂正面が町並みに向くように町域の西寄りに配されるものが多い。また、中核寺院は町域内の高度が高いところに置かれることが多いが、これは防災防衛拠点としての役割上合理的で、また、土地の高低差を利用した都市空間の階層^{ヒエラルキー}の表現であったとも解釈できる。本願寺教団はこうした点を考慮しつつ、一般に起伏がちな台地の地形を巧みに読み込みながら都市建設を行っていたといえる。

各都市の町割については、近世絵図を見ると原則的に直交街区で構成されている。なかでも中核寺院をコ(ロ)字型の街区で取り囲むものが目立ち、そこには防災防衛的な都市計画の意図がよく示されている。また、主要道路に防火用水路を設けているものも散見される。なお、多くの都市では先行する古代条里地割と無関係に都市建設がされており、そこに自立的都市を目指した本願寺教団の都市理念の反映を見ることができるとは。防災の観点から注目されるのは、台地型寺内町が総じて「農村的」な低密都市であったと考えられることである（農業従事者も少なくなかった）。すなわち、各敷地の間口は広く取られ、各町家の平面は横長となり、その一方で整然とした直交街区の町割を基本としているので、敷地の奥には広い空地（畑）ができる。これにより各街区に防火空地帯が形成され、火災の際には延焼を抑制する防災効果を生んでいたと考えられる。

註

- 1) 外敵から身を守る「防衛」の設えも、火災や水害などとともに人災に対する備えであるという点で「防災」概念に含まれるが、こと寺内町に関しては「防衛」重視の傾向が強いことから、本稿では単に「防災」というのではなく「防災防衛」と、あえて「防衛」を併記して用いる。むろん戦国時代における「人災」は現代のそれとは意味合いが異なるが、歴史都市の形成に当時の人々の「防災」意識がいかに寄与していたかを解明するという本稿の目的に照らして、両者の相違はさほど重要ではあるまい。
- 2) 金井年「寺内町の形態の類型とその変容」『寺内町の研究 第1巻』法蔵館、1998、p.192
- 3) たとえば、伊藤毅「寺内町の成り立ちと町割」(『復元日本大観6』世界文化社、1989、p.82)や西川幸治『日本都市史研究』(日本放送出版協会、1972、pp.71-165)があげられる。
- 4) 同書所収の論考の中でも特に水田義一「寺内町の建設プラン」(第1巻、p.164)と鍛代敏雄「畿内寺内町と一向一揆一戦国末期の摂河両国を中心として」(同、p.271)において、台地上に立地する寺内町が列記されている。なお、富田寺内町に隣接する富田東岡は同書に取り上げられていないが、都市形態の観点からは「寺内町」の範疇に含まれると考えられることから、本稿の考察対象に加えることとした(註7の岩波論文を参照)。
- 5) 鍛代敏雄「畿内寺内町と一向一揆」『寺内町の研究 第1巻』法蔵館、1998、pp.268-269
- 6) 本稿で用いたハザードマップは、国土数値情報「浸水想定区域データ」(データ作成年度：平成24年)、および国土数値情報「土砂災害警戒区域データ」(データ作成年度：平成27年)にもとづくものである。
- 7) 岩波由佳「摂津富田旧寺内町の成立と展開について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1989、pp.823-824
- 8) 林野全孝他『富田林寺内町 歴史的町並み保全計画調査報告書』富田林市編、1984、p.10
- 9) 伊藤裕久「在地寺内町の空間形成—河内国石川郡富田林・大ヶ塚寺内町を事例として—」『寺内町の研究 第3巻』法蔵館、1998、p.113
- 10) 岡本良一『大阪城』(岩波書店、昭和45年、p.5)、『新修大阪市史 第2巻』(新修大阪市史編纂委員会編、1988、p.622)
- 11) 木原克司「豊臣・徳川両氏の大坂城検出遺構とそれをめぐる若干の考察」所収、『大坂の歴史9号』1983、p.89
- 13) 櫻井敏雄『浄土真宗寺院の建築史的研究』法政大学出版、1997、pp.438-472
- 14) 伊藤毅「摂津石山本願寺寺内町の構成」『寺内町の研究 第2巻』法蔵館、1998、pp.255-262
- 15) 『改訂 信長公記』桑田忠親校注、新人物往来社、p.303
- 16) 田中喜男他『伝統都市の空間論・金沢：歴史・建築・色彩』弘詢社、1977、p.7
- 17) 伊藤毅「摂津石山本願寺寺内町の構成」『寺内町の研究 第2巻』法蔵館、1998、p.260
- 18) 『富田林寺内町遺跡 生活環境施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(富田林市遺跡調査会、2005.3、p.12)。また、前川要「中世集落論からみた畿内寺内町の空間構造の位置付け」(『寺内町の研究 第1巻』前掲、p.500)でも富田林寺内町の都市域の「西南部分の盛土が著しいことが判明してきている」と指摘されている。
- 19) 条里地割の地理的位置は、『地図でみる西日本の古代：律令制下の陸海交通・条里・史跡』(金田章裕他編、平凡社、2009)、『地図でみる東日本の古代：律令制下の陸海交通・条里・史跡』(同上、2012)、『井波町史 上巻』(井波町史編纂委員会編、1970)、『福井県史 資料編16下』(福井県編、1992)にもとづく。
- 20) 林野全孝他『富田林寺内町 歴史的町並み保全計画調査報告書』富田林市編、1984、p.10
- 22) 金井年「寺内町の形態の類型とその変容」『寺内町の研究 第1巻』法蔵館、1998、pp.202-207
- 23) 『富田林 寺内町 歴史的町並み保全計画調査報告書』(前掲、p.15)には、「杉山家文書」所収の図をもとに、享保15年(1730)の火災によって町域北部の壱里山町・富山町の全域と北会所町の西部を全焼したと記されている。つまり、北会所町東部より南方の町には延焼しなかったということであり、その一因として街区の空地帯の防災効果があったのかもしれない。
- 24) 谷直樹他「近世大坂屋敷町における集住形態」『大阪市立大学生活科学部紀要39』1991、p.155
- 25) 堺の人口は『角川日本地名大辞典27 大阪府』(角川書店、1983、p.521)の記述にもとづき、都市域面積は大日本帝国陸地測量部による明治42年測量「堺」(『正式二万分一地形図集成』所収、柏書房、2001)をもとに算出した。
- 26) 西川幸治他「蓮如の道—寺内町の形成と展開」『寺内町の研究 第1巻』法蔵館、1998、p.30
- 27) 『堺市史 続編 第1巻』堺市史編纂室編、1971、p.655
- 28) 『角川日本地名大辞典 18 石川県』角川書店、1990、p.261、p.264
- 29) 『城端町の歴史と文化 資料編』所収、城端町史編纂委員会編、2004、pp.5-244
- 30) 伊藤裕久「在地寺内町の空間構成」『寺内町の研究 第3巻』法蔵館、1998、p.82